

もろい

No.34



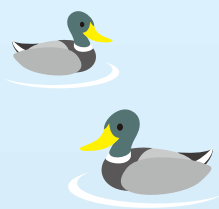
朝靄の水面に…

〜野鳥の宝庫「大山・下池」〜

白鳥の飛来数が国内でも有数の「大山・下池」。

平成20年にラムサール条約に登録され、自然学習交流館「ほとりあ」や遊歩道、野鳥の観察小屋などの整備が行われ、市民の憩いの場として四季を通して親しまれています。

鶴岡市の豊かな食文化と併せ、四季折々の変化に富んだ美しい自然環境についても、守り継いできた先人の努力に、改めて感謝したいと思います。



年頭のご挨拶

地域農業の発展を目指して



鶴岡市農業委員会

会長 三浦伸一

新年あけましておめでと
うございます。皆様にはご
健勝にて新年を迎えられま
したこと、心よりお慶び申
し上げます。

さて、昨年作柄状況は、
庄内においては103の
「やや良」、品質において
も一等米比率が98%となり
安堵したところであります。

主食用米は、飼料用米を
中心とした全国的な需給調
整が進んだことにより過剰
作付が解消され、JAの概
算金も昨年産米より少し上
昇し、低価格からの回復基
調にはなったものの、決し
て高水準という程ではなく、
課題が残る状況であったと
思います。

一方、我が国の農業は、米
価の下落を含む農産物の価
格低迷等による農業生産額
の減少や、農業従事者の高齢
化に伴う担い手不足、更に
は遊休農地の増加など、非
常に厳しい状況にあります。

政府は、昨年3月に新た
な「食料・農業・農村基本
計画」を策定し、「産業政
策」と「地域政策」を両輪
として、食料の安定供給の
確保、農村の振興、農業の
持続的発展などの施策を展
開するとしております。ま
た、農業協同組合及び農業
委員会等に関係する法律の
一部改正が国会で可決・成
立したことに伴い、今後の
地域農業の維持、発展のた

めにも、それぞれが取り組
みを強化していかなければ
ならないと考えるところで
あります。

このような状況の中、T
PP（環太平洋経済連携協
定）交渉については参加12
か国が、昨年10月5日に閣
僚会合において大筋合意と
いう結果になりました。

しかし、政府が交渉内容
を明らかにすることなく、
国民的議論もないままの大
筋合意に至ったことは甚だ
遺憾であり、国会決議との
整合性検証や、影響試算の
明示及び再生産の確保を求
めて、なお運動を継続すべ
き状況にあります。また、
ミニマムアクセス米の輸入
枠拡大は、消費量が減少し
ている中では、非常に脅威
を感じるところであり、牛
肉や豚肉の関税引き下げに
ついては大変な影響を受け
るのではないかと懸念され
るところです。

国は、T P P協定の影響
に関する国民の不安を払拭
するとともに、万全な体質

強化策を打ち出すとしてい
ますが、当農業委員会とし
ても今後の国の動向を注視
し、様々な対策についても
真の現場の農家の声を活か
されるような施策を講ずる
よう、JAや関係機関と連
携を取り、国に対してはっ
きりと意見を申し上げてい
きたいと思っております。

山形県農業委員大会が開催されました

山形県農業委員大会が10
月30日、天童市民文化会館
を会場に、県内の農業委員
など約700名が参加して
開催されました。

主催者挨拶では、農業分
野での課題が多い中、T P
P協定の大筋合意がなされ、
その内容については不明な
点が多く、今後も十分な説
明と万全な対策を求めている
こととの話がありました。

なお、大会については、
「現場の実態に即した新た
な農業委員組織・制度を確
立」などのスローガンのも
と、提案された4議案全て
が原案通り可決されました。

今後地域農業者の付託
に答えるべく、市当局や関
係団体とともに、本市の農
業振興に務め、委員・職員
が一体となり、がんばって
まいりますので、今後とも
ご指導、ご鞭撻をよろしく
お願い申し上げます、皆様方
のご多幸を祈念し、新年のご
挨拶いたします。

また、新しい農業委員会
制度への適切な移行につい
て、「農業委員会法が改正
されてもその機能と役割は
変わらず、地域農業の実態
に合った組織体制を構築さ
せよう」などの決意表明が
ありました。

(農業委員 清野 吉喜)





農業委員会定例総会を開催

～本市農業振興対策等へ建議・要望～

農業委員会が毎年行っている建議要望書活動は、重要な活動のひとつであり、現場の声などを行政へ反映させるための取り組みです。

鶴岡市農業委員会第三回

定例総会が10月23日、第三学区コミュニティセンター

を会場に開催されました。今回の総会では、5件の

建議・要望が議事として上程され、発議者の趣旨説明

に続き、慎重審議を行った結果、全て原案どおり可決

されました。

なお、今総会に提案されました議案は以下のとおりです。

■平成28年度鶴岡市農業振興施策予算に関する建議書

■農地中間管理事業にかか
る簡易な圃場整備に関し
ての要望書

■水田畑地化基盤強化対策
事業採択地区の早期事業
実施と第三期対策の実施
に関する要望書

■学校給食における特別献
立新設に関する要望書

■中学校における（仮称）
「農業部」の創設に関する
要望書

また、総会終了後は全員協議会が行われ、政策企画課食文化推進室長を講師に、10月に行われたミラノ国際博覧会における本市出店状況の報告と食文化推進の取り組みについて研修を行いました。



市長、教育長へ直接要望書を提出

総会において決議された建議・要望については、11月24日に渡部長和会長職務代理者ほか6名で難波信昭教育長へ、また、11月27日には三浦伸一会長ほか3名が榎本政規市長を訪れ、要望趣旨等の説明を行いながら直接手渡しました。

榎本市長からは、「担い手の問題は、中山間を中心に身近な問題であり、法人化等、地域に合った農業を進めていきたい」、また、難波教育長からは、「特別献立の新設については、現場の給食センターとも相談していきたい」とのお話がありました。

農業委員会では、今後も出来る限り農業の現場における生の声を市及び国・県等の関係機関へ伝え、地域農業を守っていくとともに、農業者の皆さんが意欲と希望を持って農業に取り組めるよう活動していきます。



榎本市長へ提出



難波教育長へ提出

農業振興・担い手専門委員会活動報告

青年農業者、山形大学農学部学生、
農業委員との交流会を実施

この交流会は、農業振興・担い手専門委員会が、地域の青年農業者や山大農学部の学生との世代を超えた交流を通じて、青年農業者等の実情などを理解することで、今後の担い手の育成や委員活動に反映させるため企画したものです。



今回で3回目の実施

本年度の山形大学農学部学生（7名）と当専門委員会（10名）の交流事業は、10月22日に青年農業者4名を交え行われました。今回は、参加した青年農業者2名の圃場を視察し、その後、意見交換会が設けられました。

青年農業者の圃場を視察

最初に訪れたのは、就農4年目になる茨新田の佐藤司さん（31歳）の圃場です。労働力が一人のため、人手がかからず、かつ、端境期に収穫できる品目を栽培したいということから、人参をメインにミニトマト、柿等を含め1・2畝を耕作しています。



人は年2回収穫して、給食センターや産直等の安定した販路を確保し、ミニトマトは数種類の品種を作付して、ニーズを捉えた選択をしているようです。

そんな佐藤さんは、更なる規模拡大も考えながら地域の法人にもかわり、稲のホールクroppサイレージ（飼料）にも取り組んでいます。この飼料栽培も初年度は6畝、来年度は12畝まで拡大する予定だそうです。

次に中京田の鈴木俊将さんの圃場を視察しました。鈴木さんは就農3年目ですが、鶴岡では珍しく、大きくらげをハウス栽培しており、毎年規模拡大を図っています。今年には三千菌床で、パート2名を雇用して収穫をしているとのことでした。



産直、業者に直接販売しています。佐藤さん、鈴木さん共に、栽培品目を選ぶうえで、施設利用の作物であること、鶴岡であまり栽培されていないことなどに着眼し探したとのことでした。

世代を超えて意見交換

意見交換会では、青年就農者からは『地域に貢献したい』『農業をやりたい人のサポートができれば』などの意見があり、また学生側からも多くの質問が出され、とても活発な交換会となりました。

今まさにTPPにより農業情勢が大きく変わろうとしています。その中で若い人たちが真剣に地域農業を考えていることを知り、心強いと思うと同時に、私達農業委員がその手助けとなるような働きがけをしなければならぬと強く感じました。

（農業委員 佐々木 貢昌）

主に生食用として販売し、冬場は乾燥した物を販売するなど、日々温度や水管理に気を配り、安定した品質のものを『鈴木屋本店』というブランドで地元JAや

食育・地産地消専門委員会
視察研修報告

地産・地消等、 先進地における 取組を学ぶ

地元食材を生かした 地産・地消の取り組み

食育・地産地消専門委員会では11月26、27日の二日間、山形・宮城両県内の先進地に委員11名と事務局2名の13名で研修視察に出かけました。

一日目は、あいにくの雨。

最初に向いた先は、宮城県美里町で農家レストランと産直を営んでいる「株式会社はなやか」です。

地元の食材をPRしながら「田舎の母の味」をコンセプトに、平成13年農産物直売施設併設農家レストラン「はなやか亭」を開業しました。地元食材を使った



料理と惣菜、漬け物など、常時30〜40種の加工品の販売もしており、平成22年には、新たに菜園レストラン「野の風」もオープンしたとのことでした。

先端的な農業技術で イチゴを栽培

二日目の視察先は、最先端施設園芸の研究・栽培を行っている農業生産法人「株式会社GRA」です。

宮城県亶理町の特産品だったイチゴが、東日本大震災により、95%のイチゴハウスが無くなってしまいました。この施設は、復興庁・農水省プロジェクト研究事業で、最新技術のハウスにより、イチゴの空白期間である夏秋に栽培ができる研究もしていました。



ハウスでは二万本のイチゴを養液循環栽培によりコストを削減するとともに、LED補光による高収量、高品質化等の実験、研究をしていました。

最後は山形県に移動し、朝日町の農事組合法人「うまいくだもの園」を視察しました。オレンジ色の屋根が特徴の施設では、自家生産の果物で作った添加物の入らないスイーツなどを全国へ販売しています。

今回の研修でお話を伺った皆さんに共通したことは、

おにぎり上手に できたかな？ 食育・地産地消専門 委員会食育活動

「地元のために何かをしたい」と言い思い。
勉強にもなり、感銘を受けた視察研修でした。
(農業委員 小南 美弥子)

食育・地産地消専門委員会では11月13日、本年度で四回の実施となる食育活動を朝日保育園にて行いました。

朝日保育園では、園独自に月一回の食育活動を行っているとのこと、当委員会の活動についても快く賛同して下さいました。



緊張しながら始めた「お米のはなし」に、つや姫知ってる！や、じじちゃん作ってる！と園児たちの元気な声。

ご飯が炊きあがる様子をガラス製の透明な鍋を使い、炊飯中の様子や匂いなどを感ずる体験をした後、昼食で食べるおにぎりを自分でつくり、最後にみんなで元気いっぱい「つや姫体操」を行いました。

今後もこの活動を継続して取り組み、もっと多くの子供たちに、「お米」の「大切さ」や「おいしさ」を伝えていかなければ、と強く感じました。

(農業委員 伊藤 由紀子)



有限会社いとうファーム(鶴岡 矢馳)

代表取締役社長 伊藤 稔さん



法人訪問

◆会社概要

- 役員 2 名、従業員 7 名(収穫パート除く)
- 経営内容
 水稻14.0畝、枝豆7.0畝、赤カブ1.5畝、
 一般野菜1.0畝、フキノトウ0.2畝、
 なめこ45t/年、食育活動(授業)100校/年

今回の法人訪問は、鶴岡市矢馳にある農業生産法人「有限会社いとうファーム」におじゃましてお話を伺いました。

法人化のきっかけは？

なめこ事業で、家内労働力では回らなくなり、雇用を入れることになりました。雇用することにより、従業員の社会保障の充実と社会の信用度を上げるため、法人化しました。

法人化のメリットは？

まず、法人化のメリットとしては、税金対策と従業員が安心して働いてもらえることです。

というのは、スタッフが安定することで、多様な知識と、様々な得意分野を持つ労働力が集まり、経営戦略や経営指針が多様化することでしょうか。色々な見方や発想があり、企画立案が活発になって会社全体が刺

激されています。

また部門責任制にしているのですが、部門ごとの相乗効果も出てきました。法人化のメリットというより、チームで仕事に取り組みメリットと言えるでしょうが、好循環が生まれているようです。デメリットはやはり冬期間の収益をいかに確保するかでしょう。



当社は、なめこの通年栽培があるのでスムーズに移行できましたが、本市農業における最大の課題と言え、冬期間耕地と労働力を生かせないことを克服しなければなりません。現在は、耕

地利用を11月まで延ばし、ふきのとう栽培に取り組んでいるところです。

これからは一人で経営することは困難な時代だと思います。後継者も含め、人を育てることが必要です。非農家でもやる気と能力があれば就農することもあるでしょう。

食育活動とは？

学校教材として、大豆ポットを出しています。秋にはみんなが作った大豆で豆腐作りやみそ造りをします。食べ物を通して「命の授業」を心がけて行っています。幼稚園、小学校、大学など100校位で行っています。農業が本来持っている力や使命を伝えられたら嬉しいです。農業は食料の供給だけではないと思うんです。自分が植物を育てて、それを自分で食すことで現代社会では学ぶ機会の少ない、生きる力とか、命の理解が深まるのではないかと思っています。

これからの展開等は？

生産活動では、それぞれの責任者がしっかり成長してほしいですね。また、これから取り組みたいのは、先ほどの食育活動の延長で、農業の教育的価値や福祉的価値を再評価してもらえるような取り組みを考えています。まだ現実的な形ではありませんが、これから時間をかけてじっくり取り組む課題だと考えています。

今回の取材を通して、伊藤社長の「農業」、特に「食育」に対する情熱がひしひしと伝わってきました。お忙しいところ、どうもありがとうございました。(農業委員 木村 充)





加入しています

農業者年金

温海 小名部
寒河江 喜和さん(39歳)



温海地域の小名部集落で水稲と養豚業を営む寒河江さん一家。水稲約450㌦の作付けと高品質庄内豚を飼育しています。

長男の喜和さんは高校卒業後、宮城県で2年間の養豚研修を行い5年間社員として養豚会社に就農していましたが、その後実家を継ぎ、研修先で知り合った奥様と結婚しました。忙しい日々の合間に子供と一緒に遊んだり、野球の試合を応援したりと子煩悩な4人のお子さんのパパです。

農業経営については、健康でおいしい豚肉を作りその堆肥を使った米を作り、循環型の健康的な農業を目指しており、今年度は子豚がのびのび健康で暮らせるように畜産の施設を増築しました。我が子同様、子豚の生育環境を考えているようです。

農業者年金については、農業委員の説明や、既に入っていた父の喜一郎さんの薦めもあり、将来のため



に加入したとのことでした。「農業情勢はこれから目まぐるしく変化していく時代になっていくとは思いますが、積立方式の年金なので、安心度が高いかなと思っています。現在は政策支援での加入となっており、掛金の方が少し助かっているところですよ。」と話をしてくれました。

また、家族の将来のためにも女性の年金加入は大切な事だと思っているとのことと、奥様の啓子さんの加入についても前向きに検討しているとのことでした。

(農業委員 五十嵐 覚)

農業者年金協会交流会 グランドゴルフ大会を開催

10月27日、農業者年金協会が榊引総合運動公園を会場に、各地域から79名の会員の皆さんの参加のもと開催されました。

始めに三浦会長より鶴岡市の農業者年金加入状況について説明があり、加入推進を図る上で、会員の皆さんからも声掛けをお願いしたいとお話がありました。その後、18チームに分かれ、3コース24ホールをまわり、優勝を目指して熱戦を繰り広げました。参加者からは、「上手い!」「惜しい!」など賑やかな歓声があがり、笑顔や悔しさを見せながら、さわやかな秋晴れの中、はつらつとプレーしていました。

大会終了後には懇親会を開催し、農業者年金について情報交換しながら、和気あいあいと楽しく会員同士の親睦を深めました。

来年度は温海地域を会場に交流会を開催予定です。皆さんぜひご参加下さい。

◆◆◆◆◆
《大会入賞者》
おめでとうございます!

- 1位 渡部 信雄さん
- (藤島・三和) 47打
- 2位 川村 政治さん
- (藤島・上荒俣) 50打
- 3位 齋藤 宏さん
- (羽黒・玉川) 59打
- 4位 佐藤 孝夫さん
- (羽黒・赤川) 59打
- 5位 富樫 昭夫さん
- (藤島・上新田) 59打
- 6位 難波 東治さん
- (朝日・熊出中) 59打
- 7位 宮崎 勝雄さん
- (朝日・野中) 60打



つるおか大産業まつり



10月17日~18日

農業委員会では、昨年同様「手づくり寄せ豆腐のふるまい」、「農産物の販売」、「耕作放棄地解消事例の紹介」などを行いました。多くの皆様のご来場、ありがとうございました!!



農地等の貸し付け・売り渡しに関する農地の情報(アグリランドバンク)を公表します

これまで、農地の貸し借り、売買については、地域の農業委員や生産組合長、JA等の仲介やあっせんにより行われていますが、この度、貸し付け、売り渡しを希望する農地等の情報を一元化し、農業委員会事務局及び分室窓口やJAの窓口、又は農業委員会ホームページで広く農業者に公表することとしました。公表された農地の借り受け、譲り受け等を希望する場合は、農業委員会事務局にお申し出ください。なお、公表の開始は、1月下旬を予定しています。

お問い合わせは農業委員会事務局・各分室まで。

農業委員が代わりました

平成27年12月1日付けで、鶴岡市議会からの推薦委員が交代しましたのでお知らせします。

◇鶴岡市議会推薦
退任委員

齋藤 久 委員

新任委員

本間 信一 委員



本間信一 委員

農業委員会委員選挙人名簿搭載申請書の廃止について

農業委員会等に関する法律の改正に伴い、平成28年度より「農業委員の公選制」が廃止されることとなりました。

このため、毎年12月に皆様へお送りしておりました、「農業委員会選挙人名簿搭載申請書」は不要となりましたのでお知らせいたします。

あとがき

昨年は夏前までの小雨・高温による一部農産物への影響があったものの、田植え以降はおおむね好天に恵まれたこともあり、稲作を含め、各農作物とも平年並み以上の作柄で収穫を終えることができましたのではないのでしょうか。

しかしながら、TPP協定の大筋合意や国の農業施策の転換など、今後も農業を取り巻く状況は著しく変化していきます。

これからは、様々な変化に対応できる鋭い経営感覚を持った農業者とならなければ、と思うこの頃です。

(丸山 晃聖)